# 高退協ニュース

No.234
2022年
1月1日
発行
高知高退協
事務局
〒780-0850
高知県高等学校退職教職員協議会
高知市丸ノ内2丁目1～10
高知城ホール高教組気付
連絡先　TEL　088（822）6822
郵便振替口座01650～2～18893

寅

## 新年あいさつ
## 力を蓄え、再スタートを

高退協会長　川村喜美

2021年の夏はコロナ感染症が猛威をふるい、この文明の進化した現代において、自宅療養と言う名のもとに、医療にかかることができずに亡くなっていった人々が多数でました。『人間の命』の重さが問われた夏でした。

秋の総選挙では政権交代とはいきませんでしたが、市民と野党の共闘が自民党の現幹事長や元幹事長の選挙区での当選を許しませんでした。これは史上初めてのことだそうです。議席数では差がありますが、選挙区ごとでは肉薄した地区がたくさんあります。日経新聞でも「自民党薄氷の勝利」と報じました。政権交代の路はたやすくはありません。力を蓄え、再スタートをきりましょう。

「人生」は、「生き続けるための展望を持っているかどうかで大きくちがってくる」と言われます。高齢化によって、体調不良や運動面での困難があっても、展望があれば日々は生き生きとする。その展望は身近なものでも、大きなものでも。

私達には「戦争のない平和な社会を次世代につなぐ」という壮大な展望があります。憲法9条改悪におけての動きが激しくなる中で、憲法9条を守ること、民主主義を守ること、人間の尊厳を守ること。私達の「展望」はよりいっそう輝きを増しています。

民衆の命と暮らしを守る民主主義者として今後も展望を持って、仲間とともに支え合って歩んでまいりましょう。

コロナ感染の落ち着きを確認次第、高退協として会員の学習を兼ねた交流の場を東部でも西部でも計画したいと考えています。また、本年11月頃には四国ブロック学習交流集会が高知県で開催される予定です。高退協がその担当となっていますので、ぜひたくさんの会員のみなさんの参加をよろしくお願いいたします。集うこと、学ぶことで力を蓄えましょう。

最後に我らが大先輩、山原健二郎さんの「詩（うた）」を贈ります。

## 2021 高退協　新春初歩きのお誘い

◎日時
2022年1月5日（水）
◎10:00 皿ヶ峰第2駐車場　集合・登山開始
皿ヶ峰方面（体力により皿ヶ峰まで/鷲尾山往復）
※OPコース（10:00神田の和霊神社集合　烏帽子山～鷲尾山～鏡川みどりの広場で解散）もあります
詳細は今回同封の案内チラシをご覧ください

2021年1月5日　新春初歩き

「寒禍　胸に一輪　地下侍（じげざむらい）」
「愚直にも生きしものかなこの修羅路　地下侍（じげざむらい）の脳目もふらず」
「花咲えに絶えて迎えし春一番　嵐をよびて　桜花らんまん」

### 哀悼

安芸　和子　さん
2021年12月13日逝去
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## オンライン「第66回日本母親大会in沖縄」
## ～いなぐや　いくさの　さちばい
## （女性は闘いの先頭に立つ）～

川村　喜美

昨年沖縄での実施予定がコロナ禍のために中止となり、2年ぶりの日本大会がオンラインで11月13日に開催されました。沖縄に行って、辺野古の埋め立て反対の列に加わりたいと参加を希望していましたが、現地に行くことは叶いませんでした。しかし、厳しいコロナ禍の沖縄で、懸命に開催に努力し続けた皆さんのおかげで、全国では当初6000人の参加予定のところ、その2倍の1万2000人が全国の会場で視聴しました。

高知県でも10の会場で、200名が参加視聴しました。

初めてのオンラインによる日本大会でしたが、大きな混乱もなく視聴できました。

記念講演は沖縄県の弁護士仲山忠克さんでテーマは「生命の尊厳が保障される社会をめざして」でした。生命の尊厳を奪う最大の要因は戦争であり、「武力によらない平和の理念は共生であり、戦争消滅化である」。軍事力全廃におけての方策は①核兵器禁止条約への日本の署名・批准②北東アジア平和共同体の創設　③自衛隊の国土災害救助隊への組織変えである　と話されました。

軍事力全廃・非武装の良さは『子どもが戦争で殺されることが心配がないことだ』との言葉が心に残りました。米軍兵の女性暴行事件でも、小さな記事から女性を中心に声をあげ、8万5千人の集会となりました。沖縄の言葉に「いなぐやは闘いの先頭に立つ」があります。大衆運動の原動力・推進力はいつも女性であると、母親運動へのエールを送られました。

講演以外でも沖縄の見学分科会予定地の映像も紹介されました。なかなか県外まで行くことが困難な人にとって、オンライン開催は地元で日本大会の様子が味わえる利点があります。しかし、1万人近くの全国の女性たちが一堂に集う迫力も捨てがたいものがあります。来年は群馬と埼玉です。

私は幡多会場の安並体育館会議室で視聴しました。オンライン視聴に24名とたくさんの人が参加してくれました。オンラインの機器は今回も川渕誠司さんご夫婦が全面的に協力してくださいました。ありがとうございました。

## 悲劇を過去の話で終わらせてはならない
### 王希奇展「一九四六」

野村　幸司

王希奇展「一九四六」に行ってきた。

広い会場の壁一杯に広がる3m×20mに及ぶ圧倒的迫力の絵画。

一面暗い色調の灰褐色で覆われた作品をよく見ると、何隻かの巨大な米軍輸送船の船影。その手前にはやつれ切ったおびただしい人間の行列。近づいてその姿を確認すると、ぐったりとした赤ちゃんに乳を与えようとする母親、老人を背負う男性、負傷者を担架で運ぶ看護師、遺骨が入ったつぼを抱えた少年の姿…。憔悴しきった人々の姿が、一人ひとり丁寧に描かれていた。帰国を喜ぶ気力さえ、人々は失っていたのだろうか。

作者の王希奇（ワンシーチー）さんは、「墨絵と油絵が融合する独自のスタイルを確立した遼寧省錦州市出身の歴史画家」とのこと。「難民状態で冬を越した残留日本人105万人余が故国へ送還された史実を、祖父から聞かされて知ったという。のちに、引き揚げの子供たちの姿をとらえた写真に出合って衝撃を受け、構想から7年、制作に3年半をかけて完成させた」という。

「被害者である中国の画家がなぜこの絵を描いたのか」との問に対しては、「戦争ほど愚かな行為はない。あの戦争で日本人は加害者でありながら被害者。引き揚げの史実を絵にして後世に伝え、平和の尊さを知ってほしかった」と応えている。

「引き上げ」の悲劇、これは天災ではなく、国家がもたらした災害である。しかしその責任が追及され、断罪されることはなかった。許してはならない事を許してしまう事により、何事にも責任を取らない政治が今に続いている。悲劇を過去の話で終わらせてはならない、そう感じた。

一週間の絵画展であったが、予想を大きく上回る参加者があったという。主催者のみなさん、ご苦労様でした。

## 祝　米寿

ご長寿を心よりお祝い申し上げます

横田　三枝　さま（南国市大埇）
山脇　聖子　さま（高知市春野町）
和田　明　さま（高知市針木北）
中川　騰清　さま（南国市領石）
宅間　一之　さま（高知市春野町）
秦泉寺康子　さま（南国市岡豊町）
横田　慧　さま（南国市大埇）
田所　金久　さま（土佐市高岡町）
西田　令子　さま（高知市瀬戸西町）
横川　哲郎　さま（高知市北端町）
末久　智子　さま（静岡県浜松市）
山中伯奈子　さま（高知市春野町）
井上　徳治　さま（高知市万々）
平井　楠子　さま（四万十市右山元町）
柳井　卓　さま（高知市鴨部）
木戸　秀雄　さま（四万十市中村丸の内）